

2019年度 第4回小6統一合判 **国語**
偏差値5上げる！ この1問

2 論説・説明文 畑村洋太郎「失敗学のすすめ」

問十一 本文の内容として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 失敗を恐れて避けようとするには意味がなく、むしろ失敗を恐れずに強い意志と勇気を持って突き進んでいく者だけが、この時代において求められる新しい仕事をやりとげることができる。
- イ 世の中には必要な失敗と不必要な失敗があり、不必要な失敗は法則を理解して未然に防止すべきだが、必要な失敗は経験することが自分自身の今後の大きな成長や仕事の発展への源にもなる。
- ウ 失敗に負のイメージを持たず情報共有を積極的に行うことで創造性を高めてきた諸外国にならない、日本でも失敗経験をもとに新たな道を創造するような方法を模索することが今後の課題である。
- エ 創造的な仕事をする上で失敗を避けることは不可能だが、それらと向き合いメカニズムを理解することによって、失敗を防いだり、発生した場合に即(そく)座(ざ)に対応したりすることが可能になる。

思考コード： **B 1**

思考スキル： **抽象化・比較**

本文の内容と一致しているかを判断する正誤問題です。要点をまとめた**(抽象化)**各選択肢をそれぞれ**比較**することで、本文と一致しない点(間違っている点)をはっきりさせることができれば、正解肢が浮かび上がります。

アの内容「これとは正反対に…」以下の箇所をまとめたものですが、「危険を認識できない無知が背景にあるとすれば、まわりの人々にとっては、ただ迷惑なだけ」と筆者はこの生き方を否定しています。

イの内容は一見正解かと思いがちですが、そもそも本文に「必要な失敗と不必要な失敗」を区別している記述はありません。本文後半の「大切なのは…」以下に「失敗の法則を理解し…未然に防止する術を覚えること」とありますが、これは「必要な失敗」と「不必要な失敗」を区別した見方ではなく、「失敗」そのものを経験することが自分の成長を導く力になると述べているので×となります。

ウは「これは受験勉強にかぎりません。…」以下の段落を対象とした内容の選択肢ですが、「失敗経験を通じて新たな道を模索する」「創造力を培う演習が行われる機会」がないことを諸外国が指摘しているとありますが、諸外国が「失敗に負のイメージを持たず情報共有を積極的に行うことで創造性を高めてきた」とは書かれていません。

よって正解はエとなります。本文一致の正誤問題は最終問題に設定されている場合が多いのですが、文章全体の「あらすじ」をつかむヒントにもなります。また、本文を読んだ直後であれば、内容が記憶に残っていますから、忘れないうちに解いてしまうのも得点を伸ばすためのポイントとなります。

★設問別正答率

* 色がついている問題が該当問題です。

[illegible]

2019年度 第4回小6統一合判 算数
偏差値5上げる！ この1問

2(1) 組み合わせ

A、B、C、D、E、Fの6人の中から体育委員を4人選ぶとき、全部で何通りの選び方がありますか。

(解答・解説)

6人の中から4人を選ぶ選び方は、6人の中から選ばれない2人を選ぶ選び方と同じです。

$$6 \times 5 \div 2 = 15 \text{ (通り)}$$

(1) 思考コード： **A 1**

思考スキル： **知識 再現する**

この問題は、単純な知識確認の問題ですが、全体の正答率は **45.9%** と予想を大きく下回っています。また、全体の誤答率も **49.4%** と予想を上回っています。偏差値別正答率を見ても、偏差値「74～70」でようやく正答率 90% を上回っています。

偏差値別正答率									
78～75	74～70	69～65	64～60	59～55	54～50	49～45	44～40	39～35	34～28
98.7	92.8	86.8	77.9	66.4	48.5	37.1	21.9	9.8	4.1

この問題は「組み合わせ」を考える問題です。「6人の中から4人を選ぶ選び方」を求めるため、4人の「並べ方」は関係ありません。それにもかかわらず、「6人の中から4人を選んで並べる並べ方」となる「360通り」や、「6人の並べ方」となる「720通り」を解答している答案が非常に多く見られました。同じようなミスは、**2**(5)でもありました。ここでは「バスケットの枚数」を答えるにもかかわらず、子どもの人数を解答している答案も見られました。

どちらの問題も、解答までの方針立てに手間がかかるような問題ではありません。しかし、多くの受験生が問われていることを誤読しています。

一方、**5**(1)では、問題の情報を読み取り、「表に18と書かれたカードの裏に書かれている数」つまり、「18の倍数のうち、100以下で最も大きい数」を正しく解答している答案が数多く見られました。上の**1**(1)の正答率の低さを考えると、「18の約数」を解答している答案があってもよさそうなものですが、「約数」を解答している答案はほとんどありませんでした。偏差値別正答率を見ても、偏差値「54～50」で正答率がほぼ90%となっています。多くの受験生が情報の正しい読み取りができていないと考えられます。

偏差値別正答率									
78～75	74～70	69～65	64～60	59～55	54～50	49～45	44～40	39～35	34～28
100.0	99.1	99.5	98.9	96.6	89.9	82.1	75.0	62.1	39.2

一行題のように、示されている情報量の少ない問題の場合、問題文を全て読み終える前に手を動かして計算し始めているケースが多いのかもしれませんが。また、解いた経験のある典型題と誤解して、情報を読み取る前に方針立てをしていることも考えられます。

情報の読み取りは、問題に正しく解答するために欠かせません。知識の獲得^{かくとく}ができていても、情報の正しい読み取りができなければ、解答の方針立ても正しくないものになります。特に、試験中は時間に追われ、あせって読みまちがえてしまうこともありえます。

今回のように「選び方・並べ方」や「人数・枚数」など、まちがえやすいものについては、問題文を読んだ後にひと呼吸^{こきゅう}置いて、「何が問われているのか」を確認することが大切です。確実に得点したい問題をまちがえると、他の受験生と大きく差がついてしまいます。今からでも遅く^{おそ}ありません。できることに目を向け、実践^{じっせん}していきましょう。

★設問別正答率

[illegible]

1 もののとけ方について

下の表は、いろいろな温度の水100gにとける食塩とホウ酸の限界の量を表したものです。

	0℃	20℃	40℃	60℃	80℃	100℃
食塩[g]	35.7	35.8	36.3	37.1	38.0	39.3
ホウ酸[g]	2.8	4.9	8.9	14.9	23.5	38.0

- (4) 80℃の水150gにホウ酸を限界までとかしたのちに、その水溶液を20℃にまで冷やしました。このとき、何gのホウ酸がとけきらずに出てきますか。

思考コード：B1

思考スキル：理由・比較

表から「水の温度が下がるほど、水にとかすことのできるホウ酸の量は減るため、ホウ酸を限界までとかした水溶液の温度を下げると、その温度の水にとけきれない分のホウ酸が結晶となって出てくる」ということをつかみ（理由）、使う水の量が150gである（表の数値は水の量が100gの場合）ことに注意しながら、80℃のときにとかすことができる（＝80℃の水に最初にとかした）ホウ酸の量と、20℃のときにとかすことができる（＝20℃に冷やした水にとけている）ホウ酸の量を比較して（比較）、その差が水の温度を下げたときにとけきらずに出てくるホウ酸の量であることを導き出すのが、この問題の考え方のポイントです。これらのことを意識して、以下の解説を確認してみましょう。

【解説】

80℃の水150gには、 $23.5 \times 1.5 = 35.25$ (g) のホウ酸をとかすことができます。水の量を変えないままで温度を20℃にまで下げると、 $4.9 \times 1.5 = 7.35$ (g) までのホウ酸しかとかすことができないので、 $35.25 - 7.35 = 27.9$ (g) のホウ酸がとけきらずに結晶となって出てきます。

★設問別正答率

[illegible]

2019年度 第4回小6統一合判 社会

偏差値5上げる！ この1問

1 貿易に関する問題 下線①アメリカ合衆国との貿易について

問1 下線①に関連するあとの問いに答えなさい。

- (2) 日本とアメリカ合衆国の間では自動車をめぐる貿易摩擦が生じたが、日本の自動車会社がアメリカ合衆国との貿易摩擦を避けるために行ったことを、自動車の生産台数と輸出台数についてまとめた資料を参考にして、「現地」・「労働者」・「輸出」の3つの語句のうち1つ以上を使って解答らんに合わせて答えなさい。

資料 「日本車の生産台数と輸出台数」 (単位：万台)

	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
日本で生産した自動車の台数	530.3	1104.3	1348.7	1014.1	962.9
アメリカ（現地）で生産した日本車の台数	...	...	129.9	248.1	265.3
日本からアメリカへ輸出した自動車の台数	109.4	596.7	583.1	445.5	484.1

(「日本国勢図会」2013/14より作成)

解答例) 日本の自動車会社はアメリカ合衆国に工場をつくり、現地の労働者を雇って生産し、日本車の輸出量を減らして(貿易摩擦に対応した)

思考コード：B2

思考スキル：知識 抽象化 理由

貿易摩擦とは、輸出と輸入のバランスが悪くなることで起こる、経済的な問題のことです。戦後の日本とアメリカ合衆国の貿易は、日本の貿易黒字が続いたため、アメリカ合衆国が反発し、貿易上の関係が悪化していきました。とくに1970年代以降、日本の安くて性能の良い自動車のアメリカへの輸出が増えると貿易摩擦ははげしくなりました。この貿易摩擦を避けるために日本の自動車会社がとった工夫とはなんでしょうか。資料をよみ、数値をまとめて(抽象化)、それを根拠(理由)にして、貿易摩擦の解消のために日本の自動車会社が行った工夫を示します。資料の数値からは①日本で生産した自動車の台数は1990年をピークに減少していること。②アメリカ(現地)で生産した日本車の台数は1990年ごろから増加していること。③日本からアメリカへ輸出した自動車の台数は1990年ごろのピーク時に比べると減少傾向であること。の3つがわかります。これらのことから日本の自動車会社は日本でのアメリカ向けの自動車生産をやめて、現地で生産することで輸出量を減らしたと考えることができます。この問題は正答率が34.6%・誤答率が21.7%・無答率が30.5%でした。記述問題は難しいと思いますが、資料から「1990年ごろからアメリカ(現地)で日本車の生産が増えている」ということくらいは読み取れるのではないのでしょうか。この点に気付いて、貿易摩擦とはどのような状態のことなのかをよく考え解答すれば、十分に合格点はねられます。

★設問別正答率

[illegible]